

台湾の尾牙で

放
眼
日
中

日本は既に新年を迎えたが、中華圏の旧正月は2月半ば。年末である1月には、台湾で「尾牙」と呼ばれる忘年会が各地で開かれていた。忘年会といっても日本とは違い、すべて会社が費用を負担し、客や従業員の家族も招待され、盛大に行われる。今回は十数年ぶり、ある大企業の1000人規模の尾牙に参加してみた。

会場には顧客、従業員とその家族が集まり、豪華な料理を食べ、歌や踊りなどのショーが続き、皆楽しそうに盛り上がっていた。恒例？で社長夫妻が日本風に言えばいじられ笑いを取り、皆がさまざまな憂さを晴らす様子に、「台湾もまだまだ元気だな」と思ってしまった。

ただ、友人に聞くと「この程度の尾牙は中規模だ。以前はもっと盛り上がったよ」と言い、ちよつと悲し

そうな顔をした。そう、筆者が知る最も盛り上がった尾牙は今から約30年前で、皆が乾杯の連続で酒に酔い、社長が突然「営業成績トップの社員にはボーナス100カ月分出すぞ。掃除のおばさんにも20カ月だ」と叫び、歓声がこだまし、ラッキードロ―(福引)では、日本円で100万円単位の現金が飛び交い、完全にパブル状態だった。

「我々はそんな尾牙を望んでいるわけではない」と、ある若手経営者がぼつりと言う。会社の業績が少し上向き、それを従業員と共に分かち合い、ちよつとした賑わいと皆の笑顔があればそれでよいというのだ。しかし、残念ながらそれすら期待できない状況の前にし、彼は「台湾経済は谷底へまっしぐらだよ」と吐き捨てるように言う。

「鴻海、統一、康師傅など、台湾

の名だたる企業から強みのある中小企業まで、そのほとんどが中国大陸にその技術を注ぎ込んで、儲けてきたんだ。ところが昨今、表向きは環境保全だ、税金の追徴課税だという理由で、工場を閉鎖して戻って来る企業が後を絶たない。実態は政治的不仲による嫌がらせだ。そんな企業が台湾に帰って来てもすでに技術は大陸に置いてきてしまったし、将来が見込める材料がない」と言うのだ。

最後に「日本がもう少し元気だったらなあ」と小さな声で言った。日本統治が終わった後の台湾の歴史を見ていると、台湾企業は日本企業や市場をうまく利用して、その荒波を乗り切ってきた。だが、ここ30年の大陸依存、日本経済の縮小で、その構図も崩れてしまい、日本を大きな市場として見る台湾人は多くはない。

どんな環境でもたくましく生き抜いてきた台湾人は、国際情勢に明るく、目先が利き、ニッチな仕事に強く、どこにでも飛び出して行く開拓精神の持ち主だと思っているが、この厳しい環境下で、次にどんな方向性を打ち出し、どこを攻めていくのか、我々にも大いに参考になるのではないか。そして、日台がこの荒波を、相互に利用し合って乗り切っていくことを願っている。



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。